

〈資料紹介〉

橋姫蒔絵硯箱のからくり細工について

土井久美子

橋姫蒔絵硯箱

一合

江戸時代 十八世紀

幅二〇 奥行 二一・六 厚 四・一 (各cm)

本館蔵 カザールコレクション (蔵品No.2742)

被せ蓋の硯箱で、中央に硯石と水滴、両側に筆をおくための下水板をおさめる。硯石は失われているが、花文を表す七宝製円筒形の水滴が収納される。【図3】

総体は内外ともに豪華な梨子地に仕上げられており、要所に黒と朱の漆、切金などを用い、薄肉の金銀高蒔絵で、蓋表【図1】には『源氏物語』第四十五帖「橋姫」、蓋裏【図2】には『伊勢物語』第九段「東下り」にちなむ意匠、身には秋草に雲が表される。

かつては蓋裏の富士山を見ながら駒をすすめる貴人の一行の図から「伊勢物語蒔絵硯箱」としていた。蓋表に表される柳橋に水車、蛇籠のある風景、これは宇治橋と考えるのが自然であるが、貴人が宇治橋を渡る場面は『伊勢物語』に見いだせない。ところが近世の源氏絵画帖を見ると、第四十五帖「橋姫」ちなむ図として、宇治橋

を渡る薫の一行を表すものを複数見いだすことができる。^①そのため本器の名称は蓋表にある意匠ということで近年は「橋姫蒔絵硯箱」と呼んでいる。

この硯箱の一番の特色は蓋表に穿たれた円型の空間に仕掛けられた象牙製の水車である【図1】。蓋を手にとり、少し斜めになると蓋の裏に仕込まれた金属製の器に溜めた水銀が水車の上部に流れることにより、水車が勢いよくまわる仕組みになっている。

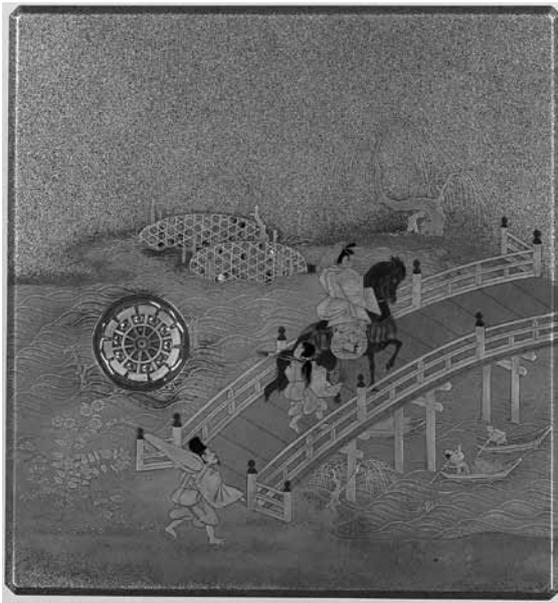
蓋の表裏は精緻な蒔絵によって覆われているため、肉眼ではどのような仕掛けが蓋の内部にあるかはわからない。ところが、平成十四年に東京国立文化財研究所に於いてX線撮影した結果、蓋の内部に金属容器が仕込まれていることが明らかになったので、その画像を紹介する。【図4】【図5】【図6】

【図4】は蓋表を撮影した画像である。水車の上部のちょうど蛇籠があるあたりに水銀を溜める器がある。そこから出た水銀は水車の左上にある穴から流れ出し、水車の下部にある穴から宇治橋の手前の袂あたりにある広い器に流れ込み、再び少し細くなった部分を通じて上の器に戻るといった仕組みになっている。水車から勢いよ

く水銀を流すために、上の器は右から左へと傾斜がついていることも特徴的である。繊細な仕組みであるため、経年変化により水銀がうまく流れなくなった場合、蓋表と蓋裏の間に仕組んだ後、梨地を施し蒔絵しているため、開けて補修することは不可能である。

水銀を用いた絡繰りによって水車をまわす仕組みの硯箱は本器の他にも東京国立博物館や根津美術館などの作品が知られているが、他の器物を撮影したX線写真を見たことがなく伝聞であるが、蓋裏の水銀の容器の形状は少しずつ異なっておりではなく、当館の硯箱のものより単純なものもあるとのことであった⁽²⁾。

江戸時代中期には、水銀を用いた段返り人形というからくり人形が作られており、寛政八年には細川頼直によってからくりの構造



【図1】橋蒔絵硯箱（蓋表）

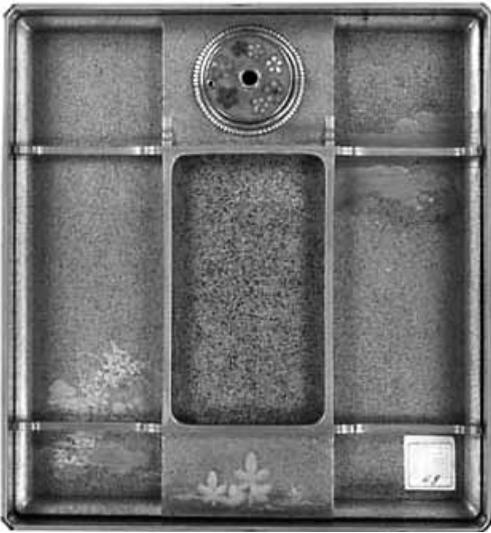
や原理、制作方法を記した『機功図彙』上巻が出版され、仕組みが広められたといわれる。からくりを用いた硯箱の制作期もおそらくその周辺の時期のことと考えることができる⁽³⁾。

註

- 1 宇治橋と貴人の一行を描く図。光源氏の異母弟である八の宮を宇治の山荘に訪ねる薫の一行である。浄土寺本源氏物語洗面散屏風（六曲一双）をはじめ「橋姫」の帖を表す主な場面の一つである。
- 2 「扇散蒔絵硯箱（蓋裏）」（東京国立博物館）、「瀧山水蒔絵硯箱」（根津美術館）などに類例がある。
- 3 『機巧図彙』細川半蔵著 寛政八年（1796）刊。



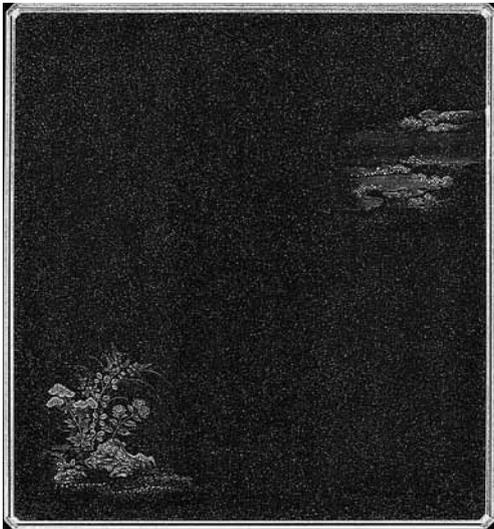
【図2】橋姫蒔絵硯箱（蓋裏）



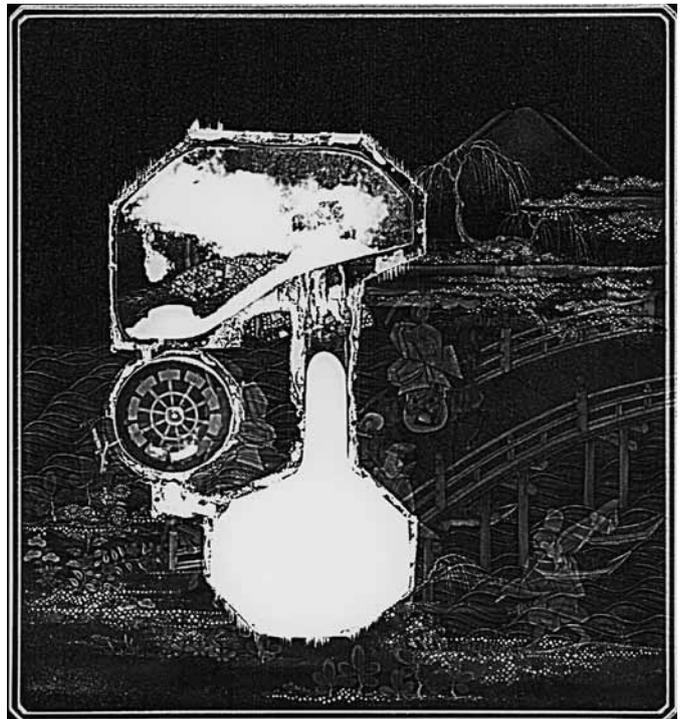
【図3】硯箱（身込）



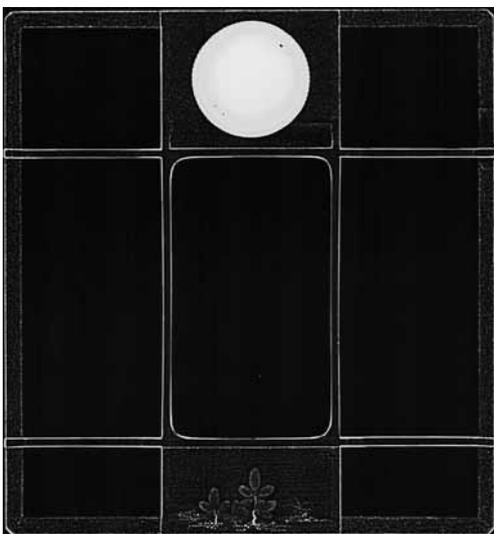
【図1】硯箱（蓋表）



【図5】硯箱（下水板をはずした身込 X線撮影）



【図4】硯箱（蓋表X線撮影）



【図6】硯箱（見込と下水板 X線撮影）